

異種共存

西尾寛治

昭和30年代前半に生まれた世代は、「世界の多様な人々と協働することが大切で、素晴らしいこと」というメッセージを、注入されつつ育ったように思う。このメッセージは、学校教育はもとより、エキスポ70やオリンピック（東京大会、札幌大会）などの国際イベント、さらに少年向けのテレビ番組や雑誌を通して絶えず発信され続けていた。

確かに一方には、東西冷戦という時代を反映したドラマもあった。だが、他方には（あるいは「それゆえに」というべきか）、『ウルトラセブン』や『サイボーグ009』のような番組やコミックが存在した。そこで人類の生存を脅かす悪と対決するのは、地球防衛軍という組織や数奇な運命によって結びつけられた仲間たちだった。しかし、いずれにせよそれは日本人を含む多国籍集団であった。もちろん、海外渡航が自由ではなかった当時の日本人の狭い国際感覚が投影されており、多国籍集団といっても欧米諸国プラス日本という偏った構成で、東南アジア出身者など皆無であった。

東京から遠く離れた中国地方の地方都市に居住するひとりの20世紀少年にとって、「世界」「国際」「インターナショナル」などの言葉はまばゆいばかりの光彩を放っていた。もっとも、それらの用語は、昭和40年代人気を博したプロレスのタイトル戦にも付されていた。レストランや食堂では、「ミックス～」という言葉に抵抗力を失った。メニューにその語を発見すると、「ミックス」→「色々なものがはいつている」→「美味しい」と連想し、つい注文してしまった。後年、雑種が純粋種よりも病気に対する抵抗力が強いと知り、大いに納得したのを思い出す。歴史には、比較的早くから興味をもった。しかし、対象地域は日本から中国、中国から東南アジアへと移った。おそらく「多様性の中の統一」というフレーズに強く惹かれてしまった結果であろう。

マレーシアやインドネシアを度々訪問するようになってからは、多民族社会の住民が

ストレスと隣合わせで生活していることも理解した。それでもなお、彼らが異種共存の伝統を育んできたことを肯定的に評価している。最近話題になっている中国の事例（チベットや新疆のウイグル人の問題）が示すように、主要民族が人口の90%以上に達する東アジア諸国には、異種に同化を強制する伝統しか残っていないと危惧しているからである。現在マレー語の“カンポン”は「村落」「故郷」を意味する語にすぎない。だが、前近代には、港市に形成された居住区を意味し、それはしばしば特定の民族が集住する場であった。17世紀のジャワのバンテンやタイのアユタヤの地図は、民族別の居住形態が東南アジアの土着の伝統であることを明示している。いわゆる「南洋日本町」も、このような港市に形成された外国人居住区のひとつであった。

さて、ここでJAMSに立ち戻ってみると、正式名称に“マレーシア”を付した研究会でありながら、インドネシアなどの近隣諸国を研究対象とする会員も加入している。これは、国民国家成立以前の時代の歴史を研究している人間には、大変ありがたいことである。近年私はマレー世界（ムラユ世界）という地域概念に関心を抱いている。周知のように、マレー世界は東南アジア島嶼部の大半を含む概念である。また、同時に近世から近代初期に存在したジョホール・リアウや後継のリアウ・リング王国の研究にも従事している。そのジョホール・リアウ王国の領域は、現在インドネシア、マレーシア、シンガポールの3つに分断されている。したがって、研究会・学会が今日の国民国家の領域別に組織されると、途方にくれるほかない。それゆえ、異分子の加入に寛容なJAMSの方針はとても心強い。

東南アジアの国名を冠した他の学会・研究会が、実際にどのようなメンバー構成であるかについては、よく把握していない。しかし、JAMSのように「異種共存」的な特徴を備えていることは、学会・研究会の大きな利点であろう。

一般に、研究対象（地域）について理解しようとするならば、対象（地域）に精通するよう努力するのは当然である。しかし、時に対象（地域）から離れ、その圏外に身を置いて眺めることも同様に重要である。そうした対象（地域）と対象（地域）外との往

還運動こそが、比較の機会を与え、対象(地域)を相対化し、その諸特徴の把握へと我々を導くからである。無論多くの研究者はこのことを熟知している。だが、時間の制約その他の阻害要因が影響し、実際にはそこまで到達できない場合も少なくない。そうなる、広範囲の地域に共通する特徴を、その中の特定地域の特徴と誤解してしまうという事態も当然発生する。上記の地域を時代と読み替えても、同様のことは起こりうる。共同研究が企画される理由の一端も、そうした過ちを回避することにある。共同研究の組織の際には、異種のメンバー(ディシプリン、テーマ、地域などの点で)の参加がしばしば要請される。それは、とりもなおさず熟練の研究者たちが、「異種のメンバーを介して、他のメンバーたちが対象と対象圏外との往還運動を体験する」ことを期待しているからに他ならない。

ところが、JAMS の場合は、ディシプリン、テーマのみならず対象地域の点でも、その「異種共存」が実現している。つまり、研究活性化の基本的条件は既に整っている。実際、ディシプリン、テーマ、地域や時代を異にする会員の参加によって、地区研究会の論議が大いに活性化し、私自身を含めた参加者が、それぞれの対象地域の個別性に対する理解を深化させたこともいく度か体験している。問題は、個々の会員が、「地区研究会や研究大会における報告テーマと自己のテーマとの関連性の有無を過度に重視しないで、積極的に参加していけるか」という点にかかっている。運営委員長という現在の立場に則していうならば、より多くの、より異種の会員を動員できる環境づくりが、今後の JAMS の個々の会員にとって、また組織の発展にとってもひじょうに重要と考えている。

今期の運営を担当するにあたり、いくつかのウィングを立ち上げた。その中には、他の学会・研究会、研究プロジェクトとの連携を推進する「研究連携ウィング」がある。他方、「社会連携ウィング」は、社会の中で新たなスタイルで研究活動を展開している多様な人々との連携を目的としている。すなわち、「機関研究者」(教育・研究機関に所属する研究者)と「市民研究者」(特定の組織に所属せずに研究活動している人々)、「実

務家研究者」(外交や援助の実務家や企業の研究部門所属の人々)との連携である。こうした2つのウィングを立ち上げるに至ったのも、上のような問題意識からである。そして、その根底にあるのは、“異種共存”というキーワードである。

同種共存型の東アジアに生きながら、異種共存型の東南アジア社会に関心を寄せる我々が、今後どれほど実りある成果をあげられるかは、我々自身が「異種共存」を更に推し進めていけるか否かにかかっている。そこで、この場を借りて、会員各位に、JAMSの有する「異種共存」性を正しく評価・理解していただき、また自ら大いに活用していただけるよう、お願いする次第である。

会報『JAMS News』発行の遅れについてのお詫び

JAMSではこれまで毎年3号の会報発行を続けてまいりましたが、今年度は運営体制の引継ぎ等の事情により会報の刊行が遅れ、1年間に1号の発行となりました。会員みなさまに深くお詫びいたします。

なお、2009年度の会報刊行体制については、次号に掲載される2008年度会員総会議事録に関連する記載がありますのでそちらもご覧ください。

広報局 山本博之